

教育長 様

校番 92 尾道商業 高等学校長
(全日制 課程)

「高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクト」に係る 学科等の特色を生かしたカリキュラム開発研究指定校 令和3年度 実施報告書

1 学校の教育目標等

(1) 教育目標

商業教育の拠点校として、根拠に基づいて考えを発信するとともに、周囲の人を巻き込んで行動できる人材を育成する。

(2) 育てたい生徒像及び学校として育成を目指す資質・能力

- ・ 根拠に基づいて自分の考えを発信できる (自己理解・自己管理能力)
- ・ 役割を果たす場面で、周囲を巻き込んで (他者と協働して) 行動できる (人間関係形成・社会形成能力)
- ・ 課題解決場面で新たな価値を創造できる (課題対応能力)
- ・ 社会人に求められる資質・能力のスキルアップに取り組むことができる。(キャリアプランニング能力)

(3) 学科等の特色

Society5.0において、グローバル化とICT化、産業サービス化が進行し、その劇的な変化に適応し、地域産業を維持し発展する人材の育成が求められている。そのために、世界経済及び地域経済に関心を持ち、自己のよさと可能性を認識しながら、必要とされる資質・能力を自立的に学ぶことができる人材を育成したいと考えている。専門高校は全国平均として進学割合が2割程度であるが、本校は進学割合が約7割であり、就職割合が約3割になっている。そのため、進路指導において就職のみならず進学に向けた教育も必要となっている。

こうした中で、商業高校として、会計と情報ビジネスの専門性を高めながら、Society5.0に向けた資質・能力を育成することが求められている。そのためには、STEAM等の教科横断的な発想に基づいて、効果的かつ効率的に育成を図る必要がある。現在、その学びとして、 Cutting Edge のイノベーションに対応したPBL等を用いた学びの場を設定し、文理の境界を越えたSTEAMによる発想を取り入れ、知ることと行動することの統合によりワクワク感のある学びの場を提供してきている。他方、もう1つの学びとして、消費者のニーズを的確に捉えて創造性を活用し商品開発を行える力を育成するために、デザイン思考による学び場を提供している。しかしその実施方法については、まだまだ改善すべき点が少なくない。

また、地域創成の視点からの教育は、まだ十分に実施できていない。地域産業の維持・発展に応えるために、地域企業が解決したい課題を、真正の学びのための研究テーマとして取り上げ、地元企業の即戦力として資質・能力等を伸ばさせる取組が求められている。しかし本校では、従来型のインターシップに基づくキャリア教育の中での学びに留まっている。将来就職したい企業の課題を自らの研究テーマとして、その企業のことを学びながら、確かなキャリア形成を図るだけでなく、PBLを使った探究を通して、実社会が求める問いを学校と企業が繋がって一体化し、真正の学びを通して必要とされる力を育成したい。また、進学希望者についても、本校は大学等と連携した取組を実施してきたが、高校時代から専門性を伸ばして進学後に大きな成果を上げることができるような教育環境にはなっていない。さらに、本校での学びは、地域において責任ある市民として活躍する人材を育成するため、特別活動等における自治力を高める取組やボランティア活動や奉仕力を高めるための教育が十分にできていない。21世紀の将来を担う人材を育成するためには、単に自分中心な思いだけでなく、社会への貢献も目指す公的な意識のある責任ある市民を育成することも大切にしていく。



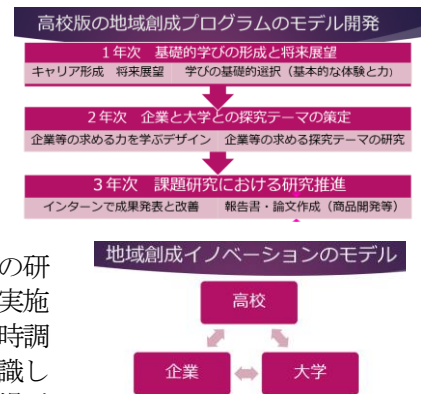
2 研究の概要

(1) 学科等の特色を生かしたカリキュラム開発の重点目標

本校の実態並びに本校に対する地域からの期待等を把握し、本校で学ぶ生徒が21世紀のグローバル化が進んだAI社会において活躍できる教育デザインを開発する。また、教育デザインの目標と指導、評価が一体化するように、育成する生徒像及び資質・能力のルーブリックとなるように改訂する。その中で、本校の特徴を生かすカリキュラムやシラバス、教科教育の在り方について検討し、そのプロトタイプを作成する。教育デザインに向けた個別最適化を推進するための総合システムの開発に取り組む。

(2) 3年後の目指す学校の姿

本校の商業科での学びが、普通科と比べて付加的な価値を持つことが認識され、就職や進学に有利に働くことが中学生やその保護者に正に認識されている。また、本校教育体制全体が、広島県東部の地域産業と教育機関と学びのプラットフォームのプロトタイプができている。企業や大学等のニーズや研究課題をリスト化して整理されており、1年次からキャリア形成に伴う試行錯誤的な選択により、興味・関心にあったキャリア選択と探究的な学びに取り組まれている。さらに、共通教科と専門教科が統合化・総合化するシステムが整い、企業や大学の研究課題やニーズに即した教育活動を工夫し、効果的、効率的、魅力的に実施できるようにカリキュラム・マッピングのプロトタイプが整備され、随時調整できる状態になっている。学校全体の教育活動も、キャリア形成を意識した地域創成の取組に柔軟に貢献し、高度で真正な学びを目指した学びの場が様々な学びの中で設定されている。高校教育の地域創成のモデル校として、地域の産業・経済・教育の求める人材育成を図る取組が行われ、地域産業の即戦力を育成する期待がさらに高まっている。その中で、専門教育の拠点校として、実践的なリベラル・アーツを推進している。その学びには、STEAM的発想により知ることを作ることに繋げたわくわくした学びが数多く行われており、21世紀のグローバル化が進んだ Society5.0 において活躍できるように、目標と指導と評価を一体化した教育デザインが行われるだけではなく、タキソノミーにおける創造・評価の水準の学びが推進され、社会のニーズに合わせた実用的なデザイン思考を身に付ける学びとともに、イノベーションに即したPBLの学びをコンソーシアムで行い、地域産業や大学研究の開発環境に適合できる学びの場を提供している。学校全体の教育活動は、キャリア・パスポートや自律学習推進プロジェクトにより、自らの学びをデザインする機会が提供され、教科を統合した学びの場の拡大が図られつつある。また、ICTを活用した個別最適化を図るためのシステムが徐々に導入され、例えば、英語会話ではソフトで個別学習が行われたり、PBLとデザイン思考の考え方に基づいた学びが数多くの教科で行われている。生徒と教師がともに様々なデータを共有して活用し、個別の即時フィードバックシステムが開発されつつあり、またコーディネーターによるファシリテーションがシステム化されてきている。



(3) 令和3年度の目標

ア アウトプット (活動指標)

- 21世紀のグローバル化が進んだAI社会のVUCAに対応できる人を育成するために、どのような考え方を導入していけばよいのか、変革の方向性を探究する。また、その時代の職業を予測するとともに、地域や中学生にとって効果的で効率的、魅力的な学びがどのようなものであるのかを検討する。その上で、商業高校の将来像をイメージ化し、その職業に必要な資質・能力や技能等を育成するためのシステム開発を行う。
- IBCPや地域創成等に関する資料を収集・整理し、共通教科と専門教科等の関係の在り方を検討し、統合する概念や考え方等を検討し、提案しながら、改革と改善を目指す。
- 生徒や教員、保護者への調査を実施し、本校の抱える課題を全体共有しながら、取組の方向性を模索する。
- 改革のアイデアを大切に、教員が一人でも多く関心を持ち、役割を担って改革できる体制を作る。
- 共通教科と専門教科のコアや見方・考え方について、新たな考え方の下で、教育の在り方と評価方法を検討し、カリキュラム・マッピングを試作する。

イ アウトカム (成果目標)

- 教師及び生徒が、自立的で自治的な教育の重要性を認識し、実際的な取組が行われている。
- 教育的なサービスによって、生徒は、学校行事や教科学習について少なくとも生徒の選択の幅が広がっている。
- 21世紀のグローバル化が進んだAI社会のVUCAに対応できる教育デザインを作成している。
- 上記教育デザインに基づいた新しい資質・能力に改善する。
- 中学生や保護者、地域の企・業等が、商業高校に何を求めているのか明らかにしている。また、本校の生徒、教師、保護者について、本校の取組を評価するために形成的評価を行っている。
- IBCP校等のカリキュラムやシラバス、POI等を検討し、基本的な概念について再検討し、本校の考え方の改善案を提示している。
- 教科のコアや見方・考え方を明確化し、リベラル・アーツ等の観点から検討し、教科教育の在り方等について共有化を図っている。
- 教科のコアとコンピテンシー等の関係を整理・調整し、各教科の役割等を明確化し、その取組を工夫し、共有化を図っている。
- 本校の学び等の指標を作成して、調査を行い、測定尺度を作成し、標準化を試みている。
- 生徒、教員、保護者等の調査結果から、意識の変化を明確化し、変革の達成度等を明確化している。

(4) 令和3年度のカリキュラム開発の内容及び校内体制

ア カリキュラムの核とする教科・科目等名

本校では、令和4年度から総合的な探究の時間を廃止し、3年次の課題研究に向けて本校の教育を集約していくことを目指す。他方、専門教科と共通教科の統合が進んでおらず、コア・カリキュラムやリベラル・アーツ

ツの考え方を導入しながら、共通教科と専門教科の間の教科横断的取組が推進されてきている。本校では、教育活動全体で、グラジュエーション・ポリシーやアドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー等を明確化し、地域社会や中学生、その保護者等に本校教育の卓越性を理解しやすいものとするとともに、学校経営の効果性、効率性、魅力化を高めることを目指す。

イ カリキュラム開発の概要

カリキュラム開発については、21世紀のグローバル化が進んだ Society5.0 の VUCA な社会において、「生きる力」を高めるために、

①自立化（主体的な学び）、②高度化（深い学び）の学びを行い、自己教育力を高め、グローバルな視座を持ち、地域創成（キャリア形成）に根差した学びの変革を目指す。そのために、下記のことを重点的に取り組む。

第1に、教師自身が自立化と自治化の重要性の認識を高めながら、教育活動全般（分掌や学年、教科等）において、キャリア・パスポートや朝の時間等を活用した自律学習を推進し、自分のよさや可能性を見いだしたり確かめたりできる個別最適化の学びの場を創設する。また、成年年齢の若年化に合わせ、ルールメーカー・プロジェクトを通して高校生活の意義や目的等を考える機会を提供し、校則を含めて見直しを行うことにより、より充実した実りの多い高校生活となることを目指す。第2に、高校版地域創成のモデルとして、外部リソースを活用したキャリア形成と一体化した真正の学びの場を提供する。専門教科と共通教科の一部を合科した時間として、企業や大学等の研究テーマに取り組む場とし、教科の枠を超えて教師が合同化・協働化を推進して、VUCA な Society5.0 社会に活躍できる資質・能力を育成する場を構築する。第3に、ICT活用による分散認知の考え方を援用したインクルーシブな学びを工夫する。第4に、さらにまた、改訂版タキソノミーに基づいた評価や創造の水準を目指した学びを展開する。第5に、グローバルな視点を取り入れた学びの場を各教科レベルで工夫をして導入する。第6に、生徒が地域社会の中で将来社会参画して責任ある市民として自治的な活動に積極的に活躍できるようにボランティア活動への参加の機会を提供する教育システムを推進する。第7に、教科教育が知識・技能を活用し、その探究の機会をより楽しく実のある真正な学びとするために、社会のニーズに合わせたデザイン思考に関する体験的な学びの場を提供するとともに、社会のイノベーションに合った力を身に付けるために、PBLを用いた学びのコンソーシアムの場で学ぶ機会を持つ。さらに、STEAMの発想で、学ぶことと作ることを融合させて、わくわく感のある学びの機会を提供する。第8に、校外の様々な企画を援用し、生徒の努力が形となって評価される機会を提供する。例えば、外部のコンテストを1つの学びのテーマ設定として、より高度な学びに繋がるように取り組ませる。

ウ 校内体制

本校の教育目標は、アドミッション・ポリシーである資質・能力を3観点（知識・技能、思考力・判断力・表現力、人間力）に対応した目標にしている。また、この目標が本校の教育改革に向け、教師集団が「チーム尾商」として一丸となって取り組めるように配慮した。さらに、教員研修会を定期的で開催し、その際、学校目標を使ったワークショップを実施するようにした。

本カリキュラム開発に取り組みを始めた6月に、教師を対象に調査を行ったとおりであった。多くの教師は、教育目標に対する意識が低く、教育活動全体の改善を目指したカリキュラム開発にほとんど関心が向けられていないことが分かった。

そこで本校が定員を割っているという課題に着目させ、商業高校の存続の危機に対する意識を高める

表 公開研究会に係るスケジュール

研究主題「本校で育成する資質・能力の伸長を図り、目標と指導と評価の一体化した授業にしよう。」

日程	第1回	第2回	第3回	公開研究会	第4回
月日	10月14日(木)	10月29日(金)	11月9日(水)	11月12日(金)	11月19日(金)
PDCA	Plan		Do/Check		Act
研修内容	企画の説明(目次決定案の検討) 指導・評価の協議	第2回 授業研究会 授業の協議	第3回 公開研究会 授業の協議	公開研究会 授業の協議	授業研究会 授業の協議
場所	同校校舎	会議室	研修目的の確認	各教室	会議室

目的は、公開研究授業に対する検討過程において、本校の教育改革の方針を確認し、理想的な授業方法の方向を具現化した授業方法に落とし込む方法を共有化することを目指す。

⇒ 従来型の公開授業の考え方に基いた不要論が出るなど、実際には参加者は少数であった。



表 校内研修会アンケート結果

変数	項目(尺度)名	F1	F2	F3
説明変数(a)	学校経営計画遂行指向(a=89)	.80	-.44	-.40
	研修テーマ遂行指向(a=81)	.80	.54	-.27
	プロジェクト推進指向(a=76)	.12	.18	-.98
目的変数(b)	今回の研修は満足した。	.16	.20	-.33
	今回の研修は役に立つものだった。	.34	.46	-.14
	今後の研修会では、もっと最新の考え方や教育実践法等を学	.48	.28	.00
	本校で取り組もうとしている事業について、もっと詳しく学	.18	.42	.18
	生徒の自律性を伸ばせるように、日々の教育活動の中で工夫	.54	.01	-.63
	生徒の自律性を伸ばせるように、日々の教育活動の中で工夫	.43	-.59	-.07
	生徒がより高い目標に向かって取り組むように、日々の教育	.53	.13	-.59
	生徒がより高い目標に向かって取り組むように、日々の教育	.35	-.42	-.48
	寄与率(a)/寄与率(b)	2.70	1.33	2.78
	正準相関係数	.92	.79	.59

表 本校の教育に対する生徒のNA

項目	内容	平均値
1 授業実施	先生は、説明して理解させようとするだけでなく、グループなどで自分たちに考えさせようとしている。	4.00
2 安心	先生は、安心して学べる場となっている。	3.95
3 実用的	学校で学んでいることは、これからの人生において学んでいくに役立つものになっている。	3.95
4 高度化要求	実際の社会に出た際に、少しでもうまくやれるようになるために、難しい課題に対応できるようにしたい。	3.95
5 高度化必要	将来雇用は得られなくなるため、新たな仕事に就くために必要な力を考え、計画的に取り組んで高度な学習する必要がある。	3.94
6 実用的	学校では、コミュニケーション能力といった実用的な力を使うように生徒に求めている。	3.93
7 協働実施	集会などでは、自分たちで集まる時間までに整理できるように、生徒同士で協力して進んでいる。	3.91
8 高度化要求	授業等では、進捗したり数値したりした際によりよくできるように、難しい課題に対応できるようにしたい。	3.91
9 探究の意義	探究等は、自分が得意な人が進んだら社会で、自分の強みで活躍するために必要な基礎的な力をつけるための学びの場である。	3.90
10 高度化必要	授業等では、自分の可能性を高めるために、難しい課題に対処できるようにすることが大切だ。	3.90

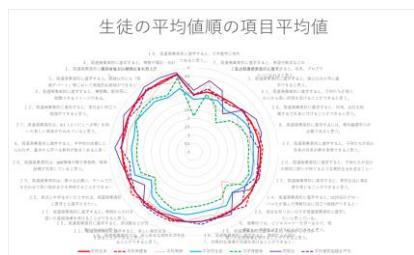


図 中学生等の本校評価調査結果



図 研修会用ワークシートの例

取組に対する自己評価をさせた上で、その自己評価に対して教師がコメントを加えていく活動を行っている。その活動を通して、生徒が自分のよいところや可能性に気づくようにファシリテートして支援を行っている。これらの取組は、独立した形で実施しているが、明らかに相乗効果を及ぼしていると考えている。総合的な探究の時間等については、各学年において教育的評価にする観点から、自己評価、相互評価、教師による評価を織り交ぜながら計画的に実施した。目標と評価の一体化を促進し、学習目標を提示する際に評価基準を提示してPBLの企画等を立てさせ、評価を通して主体的に修正したり改善したりできるように配慮した取組を行った。また教科においては、年間目標、年間エッセンシャル・クエッション、単元目標と評価基準等が計画され、単元ごとに目標と評価を事前に生徒に提示して授業が展開された。さらに、教科によっては、単元の中心的な活動として、単元ごとにパフォーマンス・テストを位置づけ、単元の開始時に、パフォーマンス・テストとその評価基準を示しておくといった取組も行われた。単元の学びの中心は、パフォーマンス・テストであることを生徒に意識させることによって、教科の学びが知識・技能の習得だけではなく、活用や探究に力点が行われていることを意識させる取組としている。またこれは、教科学習において、資質・能力の育成に対しても意識させる取組とすることに繋がってきている。

(6) カリキュラム評価

カリキュラムに関して、教師の授業改善は、公開研究会に向けて、本校の理想とする授業開発を目指して取り組み、その後、その授業をもとに各教科で公開授業を実施した。その結果、様々な授業の工夫が行われ、20名以上の教師が参観して授業観察が行われた。公開授業の質も向上し、デザイン思考を取り扱った授業やPBLを用いた授業、STEAMの観点から工夫した授業等が行われた。学習評価と同様に、年度末の生徒アンケートの結果が示すように、着実な成果が上がっていると考えられる。

また、次年度のカリキュラム開発に対する考え方も、コア・カリキュラムやリベラル・アーツ、IB校研究等を研究し、地域創成の発想をもとに、次年度の企画等を検討している。こうした中で、公開研究会及び授業改善に対する調査を行った結果、大半の教師が肯定的な回答をしており、本年度の取組は着実に成果を見せている。

3 令和3年度の成果及び課題

(1) 成果

上記のとおり、本年度分掌、学年、教科において、学科に特徴的なカリキュラム開発が推進され、本校教育の効率化、効果化、魅力化に向けた取組は、着実に推進できている。実際、商業科の学びが普通科を超えた付加的な学びがあり、Society5.0の社会で活躍する上で実質的に有利な学びができることを中学校に発信をしてきた。本年度、定員は同一であるにもかかわらず、受検者数は定員割れを改善することができた。しかし生徒指導の規則等について多様な考え方が教師だけではなく地域社会や保護者にあり、また、地域創成に向けた取組についても、その基盤となる体制作り等の基盤的な整理が必要となっている。

また、教員アンケートの結果から、まだ取り組むべき多くの課題があることが認識されていることが分かった。例えば、「企業や官公庁等からの真正な学びの推進」や「Society5.0に必要な複雑な問題に対処できる指導・支援」「現在学んでいる知識や技能が数十年後役立つなくなることへの理解の促進」「授業等での生徒自身の自律的な学びの促進」「学びのプロセスの学び」「継続課題による深い探究の学び」「生徒自身が次に何をするのが一番よいのか、自分で考えて行動できるような指導や支援」「将来を考えさせて得意分野をさらに伸ばす発展的な学び」「学んでいることが他の分野でどのように応用できるような学び」等が不十分であるという認識があることが伺える。

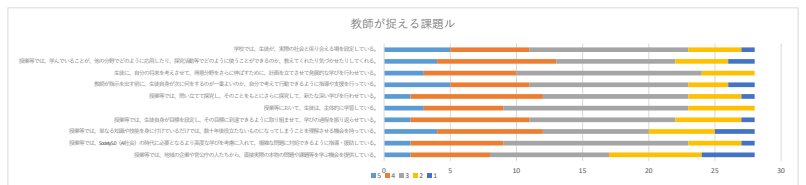


図 教師アンケート調査結果

その一方で、各教科の授業改善や、特別活動等での自立化や自治化に向けた取組は進んでおり、すでに生徒の態度が徐々に改善されてきていることが教師自身によって認識されてきていることが分かった。また、教科横断的な協働的な取組や真正な学びに向けた高度化の取組も着実に推進され、真正の学びを目指して、教科内はもちろんのこと教科外の連携も着実に進んでいることが分かった。さらにICTを活用し、分散認知の考え方を取り入れたインクルーシブの観点からの取組も進んでいる。さらにまた、単なる高度化を目指すのではなく、タキノミの考え方に基づいた評価や創造性の水準で教科の改革が進んでいる。これらの変化は、公開授業での取組だけではなく、部活動や学年会活動、委員会活動などのあらゆる教育活動に広がり、改善が見られるようになってきている。

しかし業務改善に伴うスクラップ&ビルドに関連した取組や長年伝統として取り組んできた教育内容については、教員間はもちろんのこと地域等で考え方が多様であり、早急な改革が難しい問題があることが明確化されてきた。例えば、ルールメーカー・プロジェクトは、伝統的に高校が果たしてきた教育内容の変化を伴う問題であり、ビジネス教育の重要な考え方に関与していることが明らかになった。また、高校版地域創成の学びの場を推進するためには、分掌、学年、教科において具体化を推進するためには調整すべき課題が数多くあることが明確化されてきた。さらに、働き方改革を考えると、地域創成を担うコーディネーターを新規に採用してほしいと

いう意見が出たり、スクラップ&ビルドの発想により、キャリア形成を効果的、効率的、魅力的に育成できるように、より真正の学びを目指して尾商デパートを従来型の行事に格下げし、地域創成による企業と大学との教育の合同化に向けた取組に比重を高めたりする方がよいのではないか等の案が出されてきている。

これらの多くの問題は、本校の生き残りについて当事者意識を持って議論する契機となった。例えば、本校に対する中学生の魅力について本校教師がチームとして真剣に取り組める学校に変革してきている。また、校長の指示を待っていた教育現場が、教師自身からアイデアを出し、その具体化に向けて、分掌を超えた協働関係を結びながら取り組みを進めるように変革が進んできている。さらに、地域創成の問題などのように、国立教育政策研究所の取組の成果を考慮に入れた企画が立てられるなど教師の主体的な活動が増加してきている。しかしその一方で、実際に導入を図るには、校外並びに校内の調整等が必要であり、チーム尾商として新たな取組が必要になってきている。教師集団の自主的な取組を引き出しながら、「チーム尾商」として効果性、効率性、魅力性が高まる取組になるように助言を行いながら着実に変革を推進していきたい。Society5.0の激変する社会の中で活躍し続ける人材の育成に向けて、一人一人の生徒の将来を生徒以上に教師が理解し考えて、きめ細やかな教育を実施する。地域創成の観点からキャリア形成を推進させながら、生徒の実際的な進路先に繋がる真正の学びとなるように、教科の枠を超えて教師集団が協働して提供できるように、柔軟でバランスの取れた学びの場を創設していきたい。

4 令和4年度の目標及び取組内容

(1) 令和4年度の目標

ア アウトプット（活動指標）

- ・ 本年度の教育デザインに沿ったカリキュラム・マッピングに基づいて、共通教科と専門教科、総合的な探究の時間等の役割等を明確化する。その考え方に基いて、各教科等の役割等を果たす学びの方法を工夫し、公開授業を通して職員間の学び合いを行う。
- ・ 本校の学び等の測定尺度を用いて、学び方等の工夫の効果を検証する。
- ・ 生徒、教員、保護者等の調査結果から、意識の変化を明確化し、変革の達成度等を明確化する。

イ アウトカム（成果目標）

- ・ 本校の教育デザインについて、学びの工夫の共有化を図る。また、教科の役割等を明確化し、取組の工夫の共有化を図る。
- ・ 教育デザインに基づいて、カリキュラム・マッピング等を再検討し、改善する。
- ・ 学びの測定尺度の信頼性や妥当性の検討を行うとともに、学びの変革の進行状況を明らかにする。
- ・ 生徒、教員、保護者等の調査結果から、本校の取組による意識の変化を明確化し、成果と課題を明確化する。

(2) 令和4年度のカリキュラム開発の内容及び校内体制

ア カリキュラム開発の概要

- ・ 教科の1科目以上、年間2週間程度合同学習の時間を創設できるように、カリキュラムを圧縮する教育デザインを考える。
- ・ 地域創成を基軸に基本的な構想をデザインして大学や企業等のキャッチコピーや探究テーマ等を問い合わせるアピールシートの作成を依頼する。また、大学や企業等との合同教育化プロジェクトへの参加団体を集約し、その取組の手続きを具体化しながら、コーディネーターを活用して具体的な生徒の希望の調整を図る。さらに、役割分担を明確化しながら、スケジュール管理に基づいた計画的で着実な取組を行う。
- ・ 尾商デパートの在り方を検討し、次年度以降の取組の方向性を検討し決定する。
- ・ 1年次から3年次までの地域創成プロジェクトにおける教科連携に対する取組の方向性が明確化され、そのタイムスケジュールに応じた取組を整備する。
- ・ 企業等における消費者のニーズに応じた商品開発を行うために、デザイン思考における取組を企業と一体化したプロジェクトとした教育を改善して実施する。
- ・ 1年次からキャリア形成の育成を図りながら、希望する大学や企業等を明確化させ、企業や大学等との間で決めた研究テーマや課題テーマについてPBLを用いて、企業や大学、高校が合同となって教育し、生徒の真正の学びをファシリテーションする。

イ 校内体制

- ・ 初年度と同様の校内体制を取り、毎週火曜日にコーディネーターを加えた推進委員会を開催する。また、地域創成プロジェクト委員を各学年から2名ずつを加えて、2週間に1回火曜日に、地域創成運営委員会を開催する。こうした委員会組織による運営を行い、実際的な推進体制を整備する。